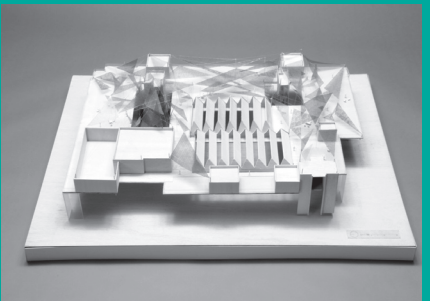


立川新庁舎アートプロジェクト

市原 慶子 ICHIHARA, Keiko
武蔵野美術大学大学 4年（土屋スタジオ）

東京都立川市では平成 22 年度に新たな市庁舎の竣工が予定されています。土屋公雄スタジオの 4 年前期設計計画Ⅵでは、その新庁舎で展開されるアートプロジェクトにグループ制作で取り組みました。立川市は「まち全体が美術館」という理念のもと、積極的にアートを取り入れたまちづくりを推進しています。例えばファーレ立川では、それぞれのアート作品が換気口、排気塔、車止め、ベンチやサインなど、街に必要とされる機能を持っており、人々の日常の中に溶け込むようにして存在していました。新庁舎におけるアート化計画もそのような構想の一端を担っています。

市庁舎の設計者である客員教授の野沢正光先生から、設計に関する様々なお話をいただきました。建物内部の機能美においては初期段階から市民との対話、ワークショップを重ねて追求していったというお話が特に印象的でした。これはいわば立川市民のためのオーダーメイド市庁舎であると言えるでしょう。ならば私たちも市庁舎のためのアート（サイト・スペシフィック・アート）を創



(写真提供 / 建築学科研究室)

るべきではないかという考えが出発点となりました。

しかしいざ作り手側に立つとどうすれば自分たちの作品がサイト・スペシフィック・アートに成り得るのかよくわかりません。まずはリサーチをして自分たちの中の情報を増やし、あらゆる方向から可能性を探っていこうという話になりました。市庁舎の模型制作に始まり、実際の施工現場にも足を運びました。現場に行くと、模型だけでは見えてこない周辺環境の音や光、色、においなどが感じられます。そこで得たものがアイデアのきっかけとなることも多々あり、改めて場所を直接体験することの大切さに気づかされました。他にも立川市の地図や歴史などからも何かヒントを得ようと図書館や資料館へも行ったりしました。また、現在の公共の場ではアートやデザインがどのように生かされているのかを知るべく、パブリックアート&ランドスケープ見学ツアーも行いました。

リサーチを進めるのと並行して、ドローイングや模型などでアイデアをとにかくたくさん出していきました。みんなの個性的なドローイングが壁一面に貼られたときのゼミ室はとても賑やかで楽しい空間となりました。その一見個性的でバラバラに見えるそれぞれのアイデアの中にも、いくつかの共通点を見出すことができます。それらをつなぎ合わせて大きな軸をつくり、そこからまたアイデアを出して可能性を広げては再度まとめるということを繰り返していきました。学校での話し合いだけでは時間が足らず、みんなでファミレスに行って夜通しでディスカッションをすることもしばしばありました。それでもなかなかしっくりするアイデアが出てこない日々が続きました。そこでもう一度図面や模型に立ち戻って考えていったところ、市庁舎という建築と関わったアート、その場から発生するアートを創ることが私たちの求めるサ

イト・スペシフィック・アートに繋がるのではないかという考えに行き着きました。再び模索の日々を続け、最終的にまとまった案は「立川の樹」を創ろうというものでした。単に植樹をするのではなく、吹き抜けから屋上にあるポリウムにかけて張り巡らされたワイヤーを伝って様々な植物が育っていき、いつしか絡み合ったその植物たちがみんなの大きな樹になるということです。新たな市庁舎とともに成長していく樹であってほしいという願いも込めています。

徹夜での作業が続いた時や途中でアイデアが出せなくなった時はつらいと感じたこともありましたが、最後まで頑張る事ができたのはゼミの皆がいたからです。これまで経験したことのない規模でのプロジェクトを成し得たのもグループ制作ならではの思いです。今回の制作を通しての経験、皆と共に過ごした時間は何より代え難いものとなりました。

研究室よりお知らせ

◎日月会の共催をいただき建築学科の芦原義信賞（全学科卒業生対象：創造的環境形成に寄与した作品）と竹山実賞（建築学科卒業生対象：建築作品・プロジェクト）は今年で第 6 回を迎えます。昨年度は芦原賞に木岡敬雄氏（1982 年卒）「大洲城天守の復元」、竹山賞に井手孝太郎氏（1989 年卒）「SHELL」が選ばれました。今年度も皆様の応募を楽しみにしております。応募要項は建築学科 HP からダウンロードできます。〆切は 12 月 14 日。

フォルマ・フォロ
Vol.10 2009.12.1

編集：坂本和子、更田邦彦
デザインフォーマット：矢萩喜従郎

印刷：株式会社 帆風
発行：武蔵野美術大学建築学科同窓会・日月会
東京都小平市小川町 1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内

自然に生まれでるもの

井手 孝太郎 IDE, Kotaro
22 回生 アールテクニク

SHELL と題するこの住宅で、竹山賞をいただいた。受賞の際、竹山先生に「与えられた状況からごく自然に生まれでるもの」「自ずと空間のかたちが生まれてきたのだろう」と審査評をいただいたが、全くその通りだった。課題を抱えながら、明け方から日に何度も現場に佇みイメージを膨らませ、そんな作業を繰り返して形を創っていった。驚いたことにその結果出てきた形は学生時代の課題の延長だった。卒業して 20 年、日々技術の習得に没頭してきたが、自由に発想出来るチャンスと巡りあった時出てきたのは武蔵美の生活のなかで考えていた事だった。あの時期にどんなに自分の感性が創造されたかを改めて思い知った。武蔵美の自由な風土が後からでは得



(写真提供 / アールテクニク)

られない感性を育ててくれたと思う。

先日モダンリビング誌の読者投票で昨年の一位に選ばれ「モダンリビング大賞」という賞をいただいた。「渾身の住宅」と評していただいたがまさにその通りだった。設計から工事監理・コンストラクションマネジメントまで、全身全霊を掛けてほぼ 3 年近くを費やした。構造体打設方法からサッシ・空調電気システム・家具・浴槽・照明・取手にいたるまでほぼ全てのものをオリジナルで制作した。独自の空調システムを抱き込んだ家具類は、家具工場に通ってディテールを探り、FRP で作った浴槽の曲面部分は自分で工房で削らせてもらった。ブロンズで鋳造した取手や装飾金物は、妻の彫金の技術を駆使して自分たちで WAX 原型を制作した。至福の仕事だった。

在学中は決して真面目とは言えない生活をしていたが、学校が好きだった。教室、特に授業中の教室に居た時間は決して長くなかつ

たと思うが、何しろ学校内に居る時間は誰より長かったのではないかなと思う。サークルの部室やホール下の喫茶室の他、当時建築学科とホールの間に在った魅力あふれる他学科の工房群と友人達。プラスチック工房、陶磁工房、木工房、石彫場といった場所が僕の居場所だった。毎日学校に行き、朝から晩まで校内のどこかに頭を突っ込んでいた。

今回、様々な材料でのカスタム部材の制作を抵抗なく進められたのも武蔵美の日々に養った実在の材料への感覚だったと思う。自分なりに精一杯過ごしたつもりの大学生活だったが、正直なところクラスの中では問題児扱いされていたのではないかなと思う。そんな僕が学校で表彰されるとは誰が予想しただろう。卒制をやっと提出出来た気分だ。

<作品のコンセプト> SHELL

林の中に巨大な貝殻のような構造体が落ちている。その構造体は何かわからないが明らかに周囲の自然の一部（岩や洞窟）ではない。いわゆる廃墟でもない。何か全く別の場所で別の目的に作られた構造体の一部。その中に床を張り、間仕切りを建て、家具を造作して住んでいる。SF 映画で土着の住人が墜落した宇宙船の残骸の中に住んでいるようなイメージ。その構造物は既に長い間そこにあるので、それを避けて樹木が育ち風景に完全に溶け込んでいる。建物が長い間愛され、朽ちることなく自然の一部として土地に溶け込んでいてほしいと考えるうちにこんな情景にたどり着いた。

朽ちるように同化するのではなく、いつまでも在り続けてこそ土地に溶け込んでいくものだと思う。建物が長い間愛され続けその地に溶け込んでいくためには、自然への抵抗力を持つ必要があると感じた。生活空間を自然から隔離し保護するシェルターとしての性能を高めることで、家自身も自然から保護され快適な空間を提供し続けられ、結果的に長期



(写真提供 / アールテクニク)

間愛され手入れされ使用され続ける。そうしてその地に溶け込んでいくものだと思う。

この地域の自然は厳しく湿度も高い。地域の多くの建物は下見板貼りの木造の家で、それらは朽ちて森に同化しているが、決して快適そうではない。多くはもう何十年も使われておらず廃墟化している。地域ではコンクリートの建物をタブー視する傾向もあるようだが、湿度の多い地表から建物を浮かせたい、しかも朽ちない躯体にしたいと実感した。

自然との境界を曖昧にし同化することを善しとする日本的な自然との関係は、繊細な瀬戸際の攻防を日々継続することで成り立っている。毎日の生活の場であればこれを維持することが出来るが、別荘は快適でなければ行かなくなるだけだ。滞在の半分は掃除や手入れで終わってしまうというのでは、直ぐに使わなくなってしまう。週末住居は余暇のための場だから、必要な機能のみを満たせばよいだけではない。心を豊かにし英気を養う空間と、自然と一体になり一日眺めていても飽き

ない風景を作り出す。現代彫刻のように周囲の自然をも豊かにし、それを空間に有機的に引きずり込む、そんな建築を目指した。<構成>敷地中央の大きなモミの樹を囲み、敷地内の松並木を望む配置を試みた。当初は三次曲面のシェルを考え、C の字断面のシェルが J の字にモミの樹を囲み、中を一部 2 層にする案だったが、予算や工法・仕上げの問題から 2 次元曲面で構成できる案に修正した。J の直線部を背の低い楕円の筒、曲線部を大きな楕円の筒とし、二つを直列に連結して諸条件に合わせて自由な曲線でカットした。楕円の断面は上下部は 330 mm、左右部は 730 mm と連続的に変化している。地上 1400 mm のレベルに床を張り、シェルの下半分が大きく外部へ張り出しテラスを支える。室内の給排気はサッシ下部の立上がりから取り、テラスの立上りのルーバーを介して外部に通じている。一般部分は冷房を設けていない。開口部は可動部分を多くとり自然の通風を効率的に取れるよう工夫した。

同級生の眼

「地球に落ちて来た男」

阿部 光史 ABE, Mitsushi

22 回生 ビーコンコミュニケーションズ（株）

コータローは不思議な男だった。入学当初から妙な存在感を発していた。酔えば高校時代の武勇伝を語り、日く大抵の遊びはもう済ませた、学校をサボってヒドい事をしでかした、果てには礼宮様を暗殺するフリをして SP を驚かせたとまで言う。今の秋篠宮殿下である。彼は高校まで学習院だったのだ。みな唖然としていた。こうしてコータローの加減を知らない大学生活が始まった。スキー部に入れば足を折る。突然奇声を発し周りを騒がせる。米軍ハウスに住めば騒ぎ過ぎて通報される。欧州に建築視察旅行に行けばイタリアを一ヶ月放浪し、帰国後は駐車違反のキップが送られて来る。歩く放射性物質のような男で、近くに寄る者はみんな被爆した。行動だけ見ればとっちらかっているとしか思えない彼は、同時に誰よりも建築を愛する男であり、熱心な勉強家であり、緻密な戦略家であった。卒業から現在に至る道のりも実に無駄がなく、建築界における今日の活躍も、彼にとっては想定内だろう。彼の目線は既に日本を越え海外へ向かっているに違いない。武蔵美でコータローのような変人に出会い、学生時代を共に過ごし、20 年を超えて刺激を受け続ける私は幸せである。



(写真提供 / アールテクニク)

Forma-Foro

目次

インタビュー
アストリッド・クライン

卒業生の素顔
井手孝太郎

REPORT/
第 1 回 フォルマ・フォロ
セミナー
岩岡竜夫

VISTA/
シンポジウム・レポート：
4 号館
「建築の創造と再生」
小倉康正

TOPICS/
日月会新会長ご挨拶
更田邦彦

製図室 /
立川新庁舎アートプロジェクト
市原慶子

表紙写真：SHELL
設計：井手孝太郎
(写真提供 / アールテクニク)

Freshness of Vision: 新鮮な驚きを提供するデザイン

アストリッド・クライン KLEIN, Astrid
クライン・ダイサム・アーキテクト

Forma Foro（以下FF）：本日はお忙しいところ、インタビューを快諾していただきありがとうございます。
既にもう何百回も聞かれた質問かもしれませんが、留学そして仕事の場に日本を選ばれた理由は何でしたか。

Astrid Klein（以下AK）：日本は海外の国としてエキゾチックな印象があり、実際に見てみたいと思っていました。留学するには費用が高かったので奨学金で行きました。当時私はアート、特に彫刻やインスタレーションを中心に勉強していて、日本の漆工芸にも惹かれていました。「シ



かんばんビル（写真提供：阿野太一）

ンプルでありながらインパクトの強い表現力」という相反する二面性を持つ漆にとっても興味を持ちました。私がロンドンのRoyal College of Artで勉強していた頃は、日本はバブル経済の真只中でした。日本の建築雑誌を見ると、信じられないような斬新なデザインの建物が載っていました。ロンドンやイタリアの古い歴史を持つ街並では、こんなに大胆な建物なんて考えられなかったのが本当にはびっくりしました。「こんな建物が建てられるんだ！」と驚いたし、実際に見てみたかったのです。まずは日本を見に行こうということで、パートナーのマーク・ダイサムと来日しました。東京にはシネマ・ライズや青山製図学院など「え〜？！」という（笑）建物がたくさんありました。奨学金が終わったらもう少し日本に残って仕事をしたいと思っていましたが、幸運なことに私達は伊東豊雄事務

所で働くチャンスに恵まれました。私達は雑誌「SD」で色々な建物に注目していましたが、テキストが全部日本語なので写真だけ見ていました。気づいたら面白いと思った作品は全部伊東さんの設計だったんです。「White U」（「中野本町の家」）、「シルバー・ハット」、「タワー・オブ・ウィンズ」（「風の塔」）などです。当時の伊東事務所はまだ大きくなかったのですが、ちょうど世界中のJALのカウンターのコンペを勝った頃で、伊東さんももっと海外に出ていかなければならないと思っていました。当時の事務所の人たちは英語をあまり話さなくて、海外から電話が来ると「ガイジン！」みたいな状態でした（笑）。伊東さんも私達のような外国人のスタッフが入れば、所員も英語が話せるようになるだろうという期待もあったかもしれません。私達は事務所に2年勤務した後独立しました。当時あるデベロッパーがたくさんマンションを持っていて新築も建てており、Richard RogersやZaha Hadidに設計を依頼していました。私達になぜアプローチしたかという、彼らは古いマンションを持っていて、それを壊して新しいものを建てると同面積がとれなくなるので改装する計画をしていたのです。当時ロンドンでドックランドの開発が進んでいて、倉庫をスタイリッシュなロフトに改装していました。当時の日本ではリノベーションという考え方を知らない人がほとんどだったし、多分単純に「イギリス人に頼めば出来るだろう」ということで（私はイギリス人ではないのですか）依頼されたのでしう。そのうち仕事が増えて伊東事務所と両立することが難しくなってきたので思い切って独立しました。しかしクライン・ダイサム・アーキテクトとして始まったところで1年以内にバ



ブルははじけてしまい、いろんなプロジェクトがペンディングになってしまい大変でした。でもヨーロッパに帰りたくなかったので、一生懸命あちこちにいるんな仕事を探したり、インテリアデザイン、展示、インスタレーション等なんでもやりました。FF：その「なんでもやる」というオープンな姿勢が、KDA（Klein Dytham architecture）らしいですね。建築、インテリア、プロダクト、グラフィックから「ベチャクチャナイト」まで幅広く・・・。
AK：そうですね。もともと私はアートを勉強していてインテリアデザインを経て建築に行ったので、アート寄りのアプローチをしてきたのです。建築を勉強したのも、AAスクールではなくてRoyal College of Artという美術大学でした。RCAの建築学科はインテリアデザインと建築両方がミックスされていて、みんな同じ課題をやりました。インテリアデザインの課題も、建築の課題も両方ありましたが、私にとってそれがとても良かったのです。美大ですからアートの他にインダストリアルデザイン、ファッション、陶芸など興味深い分野がたくさんあって、建築だけよりも面白かったし、インスピレーションを受けました。独立して突然私達建築家だけになって「つまらないね」ということで、身近なクリエイ

ター達と共同でもっと大きなスペースを借りようということで探したのがDeluxeでした。「生意気」というグラフィックデザイナーたちがいたり、「中目黒薬局」のDJ QuietStormがいたり、ドレミさんというジングルを作っている人がいたり、インテリアデザインのspin offという会社があったり、ビールを醸造する人もいました！それで「東京エール」を皆で一緒に作ったんですよ。共同作業しながら他の人がしていることからインスピレーションをうけたり、新しいアイデアを見つけることもありました。一人でやっていると感じかない事も、他の人が見て「方向性が違うんじゃないか」「こういうやり方もあるよ」と気づかせてくれました。自分の好きなものというのは、例えば家を買うときもコップを買うときも、ある共通するセンスやスタイルがあると思うのです。ジャンルごとに分割する必要はありません。トータルデザインという大げさな言葉ですが、気持ちとしてはトータルで見るのがいいと思います。FF：創作活動だけでなく、「ベチャクチャナイト」を主催して、いろんなクリエイティブな活動を発信していく立場に立って、活動されていますね。建築家の仕事はどこまで広げていけるのか、興味深いところです。
AK：建築家の仕事は無制限だと思うんです。だからこそデータバンクにいるんなことをインプットして、必要な時それを取り出せるようにしておきたいのです。「ベチャクチャナイト」もそのひとつです。必ず仕事に役に立つとも言えないけど、気分転換になるし、「今日来てよかった。プラスになった」という満足感を持っていることは、仕事をうまくやるために大事なことです。楽しむのも仕事だと思っています。ただお酒を飲んでよっぽったり週末寝ているとい

うだけじゃなくて（笑）、もっと意識しながらいろんな事を見たり人に会って楽しむということです。そのために何か努力することも必要です。何かアクションを起こさなければ何も起こらないし、楽しむ、喜ぶということもないから。

椎名英三先生がおっしゃっているのは、建築は山登りみたいなもので、半分ぐらい登って頂上を見て、「まだこんなにあるんだ」とあきめの気分になるけれど、下をみると「やっぱり、ここまで来たのを無駄にしたくない」と思う（笑）。そこでまた頑張って頂上に着くと、美しい素敵な景色が開ける。苦労した分その景色が倍ぐらい美しく見える（笑）。仕事のときも同じで、最初の企画で「そのアイデア、いいね」と盛り上がって、「よーし、やろう！」ということになるけれど、現場が始まって問題がたくさんできてきて「あー、やりたくない！」となってしまう。毎回そんな調子で



Vertu（写真提供：阿野太一）

ですが、建築が出来るとその喜びは何にも変えられないものです。
FF：KDaの作品を見ているととても楽しんで創っているというのが伝わってきます。
AK：私達は「楽しまなければ、やるべきじゃない」という思いがあります。ただ床・壁・天井をつくるだけじゃなく、人の心を動かしたいのです。心を動かせば、それが思い出になる。自分の人生も無駄にしたくない。70歳、80歳になって振り返って、「これを創って良かった」と言いたいのです。それぞれの建築に出会った人や色んなエピソードがある。高いハードルもあって、簡単ではないけれど・・・。このテーブルで、スタッフ全員でプロジェクトのブレインストーミングをする時も、みんな盛り上がっていて欲しいのです。建築プロジェクトは少なくとも2年間ぐらいかかりますから、盛り上がらない気持ちで嫌々やっていてもつらいから、「これは面白い、楽しい」「こういうものがあたらいい」ということを考えることが大事です。デザインコンペも負けることもあります、負けても決して後悔はしたくない。自分たちの提案を信じて、情熱をかけて創ったのだから、選ばなかった人が負け。（笑）どのプロジェクトもそのぐらいの気持ちでやりたいです。



Willson House（写真提供：阿野太一）

FF：学校の話を知りたいと思います。今回のバーティカルレビューで、2年生から4年生までの作品を見ていただきましたが、武蔵美の建築学科の印象はいかがですか。
AK：第一印象は、やはり美術大学だなと感じました。活き活きとしていて面白い。建築はただのオブジェじゃなく、使っている人がどんな風にそれを使って体感して楽しんでいるのかを考えていると思います。自分がそこにいたらどうだろうと想像しながら創っているのがいいし、大事なことです。FF：日本の学校と、イギリスの学校では、どんな違いを感じられますか。
AK：教育システムが全く違うと思います。文化も違いますから、違いが生まれるのはしかたがないですが。例えば日本人は個人差というのはなるべく消していきますね。海外では全く逆で、個人差を出していく教育をするのです。そういった意味で日本人はクリエイティブな分野のなかでは、ちょっと不利かもしれませんが。高校までは個人差を出すのはよくなかったのに、美術大学に入るとたんに個人差を出す競争になっていくので、学生達にはその競争感が理解しにくいかもしれません。海外では大学は社会に出て行くための練習の場です。日本は卒業して会社に入ってから練習が始まるのです。実際はクリエイティブな分野ではずっと競争です。RCAの先生には「君たちが卒業して仕事 cameたら、『ちょっと待ってください、先生に聞いてきます』とは言えないんだよ。自分の頭で考えて問題を解決して表現しろ。」と言われました。先生は全部教えてくれるわけではないのです。一番の先生は自分なのですから、学生の皆さんには自信を持って、楽しんで創ってもらいたいと思っています。（Klein Dytham architecture 事務所にて）

シンポジウム・レポート 4号館「建築の創造と再生」

小倉康正 OGURA, Yasumasa
18 回生 東海大学

1964年、まだまだキャンパスの態をなしていない土地に本格的アトリエ棟が建設された。当時、芦原義信46歳、保坂陽一郎30歳。それから45年、去る6月4日に、耐震・修復工事を終えた4号館（旧アトリエ棟）を祝したシンポジウムが鷹の台キャンパスにて開催された。基調講演には「4号館設計のころ」と題し保坂陽一郎名誉教授が立った。平仮名であらわす“むら”そして「先生を中心としたいくつかの“むら”の集まり」。なんとも初々しいイメージだ。4号館の出发点からは設計者のまっすぐな気持ちが伝わってくる。一方まっすぐなおもいは建設委員も同じであった。その結果、意欲的な提案（HPシェルの屋根、45度配置のアトリエ）は、ギリギリの調整の果て、ついに頓挫する。おりしも年末だったという。しかし現在の姿を見ると、当初のイメージがぶれることなく実現されているのが判る。正月休みをへて再開された設計、そこで「今までの統合があった」という言葉に、4号館が羽化した瞬間をみる思いがした。

続いて、油絵学科の赤塚祐二氏「使用する油絵学科の立場から」、芦原建築研究所の石岡俊二氏「4号館の耐震設計・修復工事」、建築学科の宮下勇氏「4号館からキャンパス計画へ」が順にパネラーとして登壇。後半は建築学科の長尾重武氏の進行、第一工房の高橋誠一氏と建築史家の中谷礼仁氏がコメントターとして加わり、4号館を多彩に照らし出した。最後に4号館のDOCOMOMO・Japan 145選リストアップが報告され閉幕となった。

第1回 Forma Foro セミナー

岩岡竜夫 IWAOKA, Tatsuo
16 回生 東海大学

第1回フォルマ・フォロ・セミナーが武蔵美新宿サテライトにて9月5日に開かれた。このセミナーは武蔵美建築学科に縁があり広く活躍されている方を招いて特別講義をしていただくもので、日月会会員及び一般の方や学生にも開かれている。第1回は坂本一成氏をお招きし、自身の建築に対する考え方を自作のスライド等を交えて語っていただいた。坂本氏は、1971年から83年まで約12年間武蔵美の専任教員を務められた。その頃坂本氏は住宅作家としてデビュー後、＜閉じた箱＞あるいは＜家型＞などと呼称する都市型の独立住宅を主に手掛けておられた。当時大学院生として図面を引いていた一人が、後半の対談で参加していただいた神戸芸術工科大学の鈴木明氏である。散田の家（1969）から網津小学校（2010竣工予定）まで、ほぼ全ての作品について解説した坂本氏のレクチャーは、建築設計に伴う様々な制約や件と、それとは無関係な建築の構成形式あるいは空間図式を重ねようとする時の葛藤やすり合わせの中にこそ、自由で解放された建築空間が獲得されるという内容に貫かれていた。鈴木氏の指摘した＜坂本独自のスケール＞が、構成形式と現実条件とを重ね合わせるための道具であり、かつ建物を建築に変換させる道具なのではないかということまで対話が進展したところで時間切れとなり、その後は懇親会でのフリートークへと続いた。第2回セミナーは竹山実氏をお招きし、2010年4月24日に新宿サテライトで開催される。前半は竹山氏の特別講義、後半は鄭秀和氏を招いて対談の予定である。

日月会新会長のご挨拶

更田邦彦 FUKEDA, Kunihiro
16 回生 日月会会長 更田邦彦建築研究所

本年度より日月会会長を仰せつかりました更田邦彦と申します。新執行部に変わり、会の運営を始めてから早8ヶ月が経ちました。再開いたしました日月会のホームページ <http://nichigetsukai.com/> をご覧いただいた方には、今年の基本方針につきまして、ご理解いただいていると期待しております。

お陰さまで9月5日に開催しました「フォルマ・フォロ・セミナー第1回：坂本一成講演会」も、135名の方々にご参加いただき、次回の竹山先生の講演会へと繋がることで、盛会のうちに終えることができました。
日月会メールマガジンにご登録いただいた方も、会員以外の方を含めて現在164名となり、会員数に比べてまだ登録者数が少ないのは否めませんが、徐々に日月会の活動が目に見えるようになってきています。

これらのことも含め「使い勝手のよい共有の場」として、日月会がより有効に機能していくよう基盤整備を進めており、次に述べます事項が臨時総会・執行部会にて決定され動き出しておりますので、この場でご報告させていただきます。

- 1）ホームページの再開（2009.07.）
- 2）メールマガジンの登録と配信（2009.09.）
- 3）ブログ「日進月歩・日月会」の開始（2009.10.）
：この会報を含め上記3点は、日月会から情報発信していくための場の整備
- 4）フォルマ・フォロ・セミナーの開催（2009.09.）
：日月会の目的である「会員相互の親睦と建築学科の発展に寄与する」ための場であり、日月会の活動を内外に広げていくための場の整備
- 5）会則の改正ならびに施行（2009.11.）
：日月会という場そのものの再整備 現在のみならず今後の日月会の運営指針であり、規則を分離することでより実効性を持たせた
- 6）会員の代表者会議（仮称：代表者のフォー）の開催（2009.11.）
：各代の代表者を集めた「代表幹事会」を再開するための場の整備

これらはいずれも始まったばかりの段階ですので、今後執行部の方で進めていく中で、修正・変更しながら、より実効性のあるものにしていきたいと考えております。
これまでとこれからの日月会に対するご意見やご批判も含め、今後とも会員の皆さまのお力添えを賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

◎お願い：日月会のメールマガジンに是非ご登録ください。1ヶ月に1回程度、日月会からのお知らせを配信しています。登録はホームページからお願いします。